

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	シュメール語に於けるアッカド語の借用語について 〈特集〉
Author(s)	吉川, 守
Citation	広大言語 , 6 : 8 - 16
Issue Date	1966-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046238
Right	
Relation	



シュメール語に於ける アッカド語の借用語について

吉 川 守

はじめに

シュメール語に言語面での関心を持たない学者、たとえば歴史学者、人類学者、考古学者たちが、シュメール語の借用語について興味を寄せる場合、それは主としてsubstratumの問題に關連している。

なかでも、シュメール地方の地名の来由について、近年、活発な議論がきかれるけれども、アメリカの学会では、これをsubstratumからの継承として推定する傾向が強い(註1)。

地名の問題とは別に、シュメール語の語彙の中からsubstratumの要素を析出しようとする努力も見られるが(註2)、その決定的証拠に欠ける点では、地名の場合と同じである。そのような例として、たとえば、zabar(銅)を挙げることが出来る。この語は、アッカド語にsiparruとして借用され、ヘブライ語にはšēper, アラビア語にはḡifrun, ḡufrunとして継承されている(註3)。F. Borkは、この語とラテン語のcuprum (Kupfer, Copper, Cuiivre)とを比較し、A. Salonenは、さらにフツリ語のhijarohheとの比較を試みているが(註4)、このような比較が行われる背景には、zabarをsubstratumからの借用として想定する立場がある。A. Falkensteinは、アッカド語形Siparruから、シュメール語zabarの古形として*si barを推定しているけれども(註5)、その場合、i > aの母音同化及びs > zの音韻変化が、シュメール語に於いて実際に行ったかどうかは分らない。それは、シュメール語からアッカド語に借用される場合、/z/がそのまま保持される例よりも、むしろ/z/ > /š/の移行が認められる例の方が多く指摘されるからである。(e.g. abzū > apšū (abyss), izkim > iskimmu (前兆), az > asu (熊), zimbir > sippar (地名), etc.) 従って、もしzabarをそのままシュメール語に於ける古形と認めるならば、この語は, za(石) — bar₁₁(輝く, etc.)と分析することが出来る(註6)。故に、zabarを一方的にsubstratumからの借用語として断定することは許されない。

substratumに關しては、この他に、I. J. Gelbが、substratumの存在を明証する論拠の一つとして、Graphic evidenceと呼んでいる問題がある(註7)。これは、音

価のみが知られて、それに対するシュメール語の意味の知られない楔形文字について、その音価をsubstratumからの継承と看做す立場である。

シュメール語の借用語については、このsubstratumの問題の他は、歴史時代に入って、主として(註8)アッカド語、アッシリア語などのセム語との借用関係が顕著である。

アッカド語からの借用語では、すでにEntemena (BC.2410~2380)のCone B 銘辞(Col.I, 26)にdam-ḫa-ra (< tamḫaru) (戦争)の語が見える。これより古く、Eannatum, SV銘辞(Col.XX, 16)にも, da-rí (< dârû) (永久に)の語が見え、借用語と推定される。このような借用事実を拠って、S. Fioreは、セム人の先住性を推論しているが(註9)、このような借用関係が一方的な可能性のみを示唆しているとは考えられない。

シュメールとアッカドとの相互関係については、1960年6月の20~23日、ジュネーブで開催された才九回国際アッシリア学会で、「シュメール・アッカド接触の諸相」がその中心課題として採択された。その時の成果が、E. Sollbergerの編集でGENAVA, NS Tome VIII [1960]に、Aspects du contact suméro-Akkadienとして収録されている。Edzard, Gelb, Kramer, Kraus, Amiet, von Soden, Falkenstein 七教授の執筆になり、言語面では、I. J. Gelbの前出論文及びA. Falkenstein, Kontakte zwischen Sumerern und Akkadern auf sprachlichem Gebiet (PP. 301~314)が興味深い。

Falkenstein の上記論文には、新しい借用事実の提示も認められるが、両言語間の借用については、若干の語詞を除いて、ほとんど問題はない。また借用の行われる意味領域及びその理由も比較的透明であるので、この小稿では、在来の攻究とは、少し視点を変えて、Syllabaryに見られる借用語及びそれと関連してシュメール語のアッカド語化の問題に触れて見たいと思う。

1. Syllabaryの中には、従来、アッカド語からの借用語として認知されている以外の借用語(及び借用音価)が可成り収録されている。手許にある資料から、その例を下に示して見る。才一欄(左欄)には、シュメール語の音価が示され、才二欄はその音価の与えられている楔形文字を示している。才三欄(右欄)は、才一欄の音価に対する意味がアッカド語で与えられている。

B. Zimolung, Das Sumerisch-assyrische Vokabular Ass. 523 (Leipzig (1922)) :

VS. Col. I,

9)	ša-ma-an	NI	ki-min (= šam-nu)	(油)
24)	ga-mar	NI	ka-ma-ru	(押す)
28)	ab-nu	ZÁ	ki-min (= ab-nu)	(石)
29)	a-ba-an	ZÁ	ki-min (= ab-nu)	(")
46)	e-ri-eš	IR	e-rt-šú	(香料)
54)	iš-tin	AŠ	ki-min (= iš-tin)	(一)

MSL. II, Zweispalt. p. 50~.

222)	bi-tum	É		(冢)
336)	da-an	KAL		(強い)
342)	da-lum	KAL		(")
366)	ta-ab	HI		(良い)
463a)	i-du	[Á]		(腕)
648)	ka-la-ab	UR		(犬)
653)	li-ib	ŠÁ		(心臓)

MSL. III, Sa

61)1	i-zu	GIŠ	gi-iš-(š)u	(木)
77)1	ma-ḥar	IGI	" (=i-gu-ú)	(目, 前)
82)1	ta-ab	HI	" (=du-ú-gu)	(良い)
88)1	i-lu	AN	" (=d. a-num)	(神)
96)1	ka-al-bu	UR	" (=ú-ru)	(犬)
106)1	pi-i	KA	" (ka-a-gu)	(口)
129)1	ša-ab	ERÍN	" (=ša-a-bu)	(兵士)
255)1	ša-a	GAR	ni-tu-u	(関係代名詞)
319)1	ša-ad	KUR	ku-ú-rum	(山)
320)1	la-at	KUR	" (=ku-ú-rum)	(園)

- 321) 1 ma-at | KUR | " (=ku-ú-rum) (国)
 347) 1 ki-šá-du | GÚ | " (=ki-šá-du) (首)

MSL. III. S^b Vok. p. 117

- 247) mu-uh | SAG+PA | mu-uh-hu

MSL. III. S^b B p. 145

- 253) li-bi-š | ÁB×ŠÁ | li-bu, etc.

上に例示した借用語の、シュメール語への定着の仕方に二つの型が認められる。一つは、格語尾 $v(m)$ を保持したまま借用される型 (e.g. abnu, bítum, dalum, ilu, etc.) であり、才二は、格語尾を除去した語根の形で借用される型 (šaman < šamnu, aban < abnu, etc.) である。才一の型には、なおアッカド語或いは、アッシリア語的要素がのこされているが、才二の型では、借用語として、一応安定した形態を示している。ところが、上記いずれの型に属する借用語も、Altsumerisch から Neusumerisch に亘る諸文材に於いて、その借用事実が明証されないのである。従って、この種の借用語では、その借用の行われた時期を問題にしなければならない。Nachsumerisch の後期、すなわちシュメール語が完全に死語となった時期に、この借用が行われたとすれば、これらの借用語はアッカド語による一種の訓読の性格を持つことになるだろう。

Chronology の決定には、なお後考を待たなければならないけれども、この種の借用語が、シュメール人の用いたシュメール語ではなく、アッカド人或いはアッシリア人の使用したシュメール語で使われた蓋然性は高い。この推定を裏付けると思われるのが、同じ Syllabary に認められる、次のアッカド語化の現象である。

2. 才一に指摘されるのは、子音で終るシュメール語の語詞に母音を添加する傾向である。添加される母音は、普通、語中に含まれる母音に調和している。たとえば：

MSL. III, Syllabary^a

- 19) 1 za-al-li | ZAL | " (=iá-'ú) (輝く)
 67) 1 ga-na | GÁN | gi-nu-ú (鼠)

68)	1	ga-na		GÁN		iq-lu	(嶋)
69)	1	e-ni		EN		e-nu	(主)
70)	1	i-ni		IN		in-nu	(葉)
84)	1	du-ú-gu		DÛG		〃	(良い)
87)	1	a-na		AN		d.a-num	(アヌ神)
93)	1	ú-ru		UR		ú-ru	(犬)
116)	1	gu-ub-ba		GUB		〃 (=a-ra-gub-bu-ú)	(立つ)
131)	1	ú-ta		UD		〃 (ut-tu-ú)		以下略。
187)	1	a-ra		ÁR		ub-bu		
215)	1	ul-lu		UL		giš-pu-gu-uṭ-ṭu		
225)	1	gi-ru		GÌR		〃 (=gi-ru-ú)		
232)	1	na-a-ri		NAR		〃 (=na-a-ri)		
243)	1	ga-za		GAZ				
244)	1	a-ka		ÁG		šá-nin-da-ku-i-zi-i-gub		
282)	1	e-ki		E		e-gu-ú		
312)	1	gi-e-me		GÌM		gi-mu-u		
313)	1	gi-e-me		GÌM		a-ma-at		
390)	1	e-la-mu		NIM		〃 (=e-la-mu), etc.		

MSL. III. S^b Vok. A p. 123

307)	g	ana		GÁN		e q - l u m	(嶋)
------	---	-----	--	-----	--	-------------	---	----

MSL. III. S^b Vok. A p. 128

BI	a-na		AN		šá-mu-u	(天)
----	------	--	----	--	---------	---	----

MSL. III, S^b B (p. 132~)

1)	a-na		AN		šá-mu-u	(天)
4)	mu-lu		MUL		kak-ka-bu	(星)
95)	a-ma		AM		ri-i-mu	(野牛)
96)	ú-l[u]		UL		u l - t u	(歎呼)

120)	i-š ^ˇ i	I Š ^ˇ	šá-du-u	(山)
164)	mu-nu	MUN	ṭa-ab-tum	(塩)
202)	a-ka	ÁG	ra-a-mu	(愛する)
203)	"	ÁG	ma-da-du	(討る)
205)	ga-za	GAZ	da-a-ku	(殺す)
206)	""	GAZ	he-bu-u	(砕く)
237)	š ^ˇ i-ti	Š ^ˇ ID	me-nu-tu	(計算)
245)	ka-la-ma	KALAM	ma-a-tu	(園土)
311)	ka-(r)a	KAR	e-ṭe-rum	(奪う)
312)	"	KAR	e-ke-mu	(")
313)	"	KAR	š ^ˇ u-zu-bu	(救う)
332)	ra-ba	RAB	rap-pu	(くびき)

MSL. II. p. 49

209)	gá-ar	GAR
209a)	gá-ra	GAR

Op. cit. p. 61

383)	mu-ur	H ^ˇ I × Á Š ^ˇ
383a)	mu-ru-um	H ^ˇ I × Á Š ^ˇ
407)	ḥu-lu	Š ^ˇ I . UR

Op. cit. Dreispalt. Tf. A, Kol. III, p. 133

51)	ga-da	GAD	qi-tu-(u4-um)
-----	-------	-----	---------------

上例の才一欄(左欄)に見られる音価には、明らかに、本来のシュメール語からの逸脱が認められる。この逸脱には、当然アッカド語の影響、すなわち Semiticism を想定することが出来る。(本来のシュメール語形は、za-al-li=zali に対して、その終母音を落した形、zal; ga-na に対して gan, e-ni に対して en, etc. である)。

次に挙げられるのは、有声破裂音の無声化現象である：

MSL. III, S^a p. 15~

15) l ta-al	D A L	da-al-lu
99) l pi-i	B Í	" (=i-zu-u)
100) l pi-il	B Í	" (= ")
133) l pa-ar	B A R	" (=ut-tu-ú)

MSL. II, Zweispalt. p. 71

498) ku-ub	G U B
------------	-------

MSL. II, Dreispalt. p. 139

9) ka-ab	K A B	ka-ap-p(u-um)
----------	-------	---------------

シュメール語の有声音が、アッカド語に借用される場合には無声音に変化すること、とくに有声破裂音 (p, t, k) が、無声破裂音 (b, d, g) として、ほとんど規則的に借用される事実は、すでに指摘されている通りであり、また逆の借用関係に於いては、ちょうど逆の移行の認められることも、すでに知られている。従って、上例では、dal > tal, bil > pil, bar || > par の音韻推移が、シュメール語の内部で起ったかのように見えながら、実はシュメール語の音価のアッカド語化であることが、容易に理解されると思う (註 10)。

お わ り に

叙上の如く、アッカド語からシュメール語に入った借用語は、Chronology の視点から、少くとも二種の語群に類別することが出来る。その一つは、Altsumerisch から Neusumerisch の段階で借用されたことが確認出来るグループで、両言語の接触ないしは隣接の時期にその借用が行われたと推定される。他の一つは、Nachsumerisch において、シュメール語が死語と化した時期に借用されたと考えられるグループで、この場合、二言語の重層に於ける混成的性格が窺知される。

(1966年10月29日)

註

- (1) e.g. Leo Oppenheim, *Ancient Mesopotamia*. Chicago (1964), pp. 33~34.; I. J. Gelb, *Sumerians and Akkadians in their ethno-linguistic relationship*. p. 263, etc.
- (2) 動物名, 植物名, 鉱物名, 職官名, 農耕関係の語など。語彙とは関係が薄れるけれども Silvestro Fiore, *Voices from the clay*, (Norman (1965) p. 26 は Eme-sal 語 (女性語) の成立について, Substratum の影響を想定している。一般語彙については, 古く, George A. Barton の大胆な考察がある (Some observations as to the origin of the Babylonian Syllabary = JAOS, Vol. 54, (1934), pp. 75~79)。たとえば, tar, kud の同義語の場合, kud の音価は古い ジュムデッド・ナールの泥板に在証されるから, Asianic-elamite race の用いた語で, tar はシュメール語であると結論するなど。なお地名についての考察も見られる。
- (3) cf. Armas Salonen, *Alte Substrat- und Kulturwörter im Arabischen* (= *Studia Orientalia*, XVII:2, Helsinki (1952)), p. 7
- (4) op. cit. ibidem. F. Bork の推定した原形**kupari-ko* に依拠している。
- (5) *Grammatik der Sprache Gudeas von Lagaš*, I (Roma (1949)) p. 32
- (6) *zá* に就いては, *zadim* (<*zá-dím*) (石工), *za-gìn*, *za-gul*, *za-mer* など参照。
- (7) I. J. Gelb, op. cit. pp. 262~263.
- (8) *Gutium* 語, *Hurri* 語, *kaššite* 語, *Elam* 語との言語面での関係は不明な点が多い。
- (9) op. cit. p. 26. Fiore は, A. Poebel, "Sumerische Untersuchungen," *ZA*, Vol. XXXIX (June, 1930), 149, n. 2 (筆者未見) を挙げて, 具体的な用例を示していない。
- (10) このような検討を加えずに, Syllabary に採録されているという理由だけで, *bar* || に対して, *par*, *an* に対して *ana*, etc. の音価を, 本来のシュメール語の音価として使用している学者は多い。

<附 記>

本稿で叙べた, シュメール語のアッカド語化現象は, 他の Syllabary, たとえば Richard T. Hallock, *The Chicago Syllabary and the Louvre Syllabary*

AO 7661 (Chicago〔1940〕) = AS, №7 などには認められない。従って、今後 Syllabary の系列的研究 (出土地、成立年代、伝承経路など) が必要となるだろう。…… (1)

現代イタリア語における借用語について

古 浦 敏 生

abbreviation

E. ……………英 語 G. ……………ドイツ語
Fr. ……………フランス語 Ital. ……………イタリア語
X < Y ……………借用語 X は、Y を基にして出来たものである。

(なお、特に断りなく用いられている語は、イタリア語に入りこんだ借用語だと考えて欲しい。)

§ 1. はじめに

今回の「広大言語」は「借用」の特集号である。そこで、まず、借用語研究の一般的な方法論について考えてみると、およそ、次の5点に注目すれば良いのではあるまいか。

- (1) どんな語が借用語として認められているか?
- (2) それは、どの言語から借用されたものか?
- (3) それは、何時頃借用されたものか?
- (4) その語が借用されるようになった歴史的文化的背景?
- (5) その語が借用された際、どんな音変化、形態変化、意味変化を起したか? それとも、そのままの形でとり入れられたか?

(1)(2)については、権威のある辞書数冊(尤も、どの辞書が権威があるのか、その判断はむづかしい。)を調べて、どの辞書にも「これは、A という言語からの借用語である」と書いてあれば、それを信用するのも良からう。(3)については、辞書に借用年代が出ているものもあるが、そうでない場合には、(危険な方法ではあるが) 次の方法を用いても良からう。例えば、1850年に作成された権威ある辞書には借用語として収録されていないが、1950年に作成された権威ある辞書には借用語として出ていれば、少なくとも、この100年間に借用されたものだと判断する方法である。(4)については、歴史書 etc. を調べねばなるまい。しかし、我々言語研究者にとって最も興味深いのは(5)であろう。なお、これらの点について、くわしくは、関本至:「現代ギリ